

# ARTLET

慶應義塾大学アート・センター ARTLET 第64号

## FEATURE ARTICLES

### 建築を識る、建築を語る

生活世界への眼差しを共有するために  
松隈 洋

建築アーカイブと教育  
岩井 祐介

豊かなキャンパスライフが生み出すやわらかい空間  
ホルヘ・アルマザン  
清水 俊祐

「慶應義塾の建築」プロジェクト——建築への複合的アプローチのあり方  
新倉 慎右

## INFORMATION

活動報告



上：慶應義塾三田キャンパス建築プロムナードでのガイドツアー  
©慶應義塾大学アート・センター  
下：慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスのセミナーゲストハウス  
©慶應義塾大学アート・センター／撮影：新良太

# 建築を識る、建築を語る

慶應義塾大学アート・センターは「慶應義塾の建築」のプロジェクトを2008年に立ち上げ、様々な形で建築に取り組んで来ました。建築物そのものだけでなく、竣工後の「人生」に寄り添い、時間の中での変化やそこでの人々の振る舞いをも射程とする「ユーザー・マインドの建築アーカイヴ」を掲げ、さまざまな活動を展開しています。本号では、アート・センターが取り組んで来た建築に関する様々な活動を背景に、建築がどのように日々の生活や学校教育の中で認識され、活かされる可能性があるのか、また現在の我々を取り巻く建築的な環境について、それぞれ活発に建築に関する活動を行ってきた三氏に語ってもらいます。

©慶應義塾大学アート・センター／撮影：新良太

## 生活世界への眼差しを共有するために

松隈 洋

(神奈川大学建築学部教授、京都工芸繊維大学名誉教授、京都芸術大学客員教授)

TEXT: MATSUKUMA Hiroshi

縁あって、建築界以外の一般の人びとや他分野の学生に向けて、筆者の研究対象であるモダニズム建築(Modern Architecture)を中心に、「建築という世界から見てくること」というテーマに沿って、語り伝える機会に恵まれてきた。建築界での講演や講義と同じ内容にもかかわらず、聴講者の関心の高さによるのか、「建築を識る」ことの面白さに気づいた、との感想をもらうことも多い。そのたびに、なぜ建築が社会で共有されていないのか、と自省させられた。それは、現代の建築や都市がどのようにして造られてきたのか、を知る回路がないことを意味するからだ。そのためにも、現代建築の直系のルーツであるモダニズム建築への理解が欠かせない。モダニズム建築とは、20世紀初頭の戦間期のヨーロッパにおいて、ル・コルビュジエやドイツの造形学校バウハウスの創設者ヴァルター・グロピウスらが始めた社会改革運動(Modern Movement)によって、世界的に展開された建築の新しい潮流

であり、その特徴は、装飾のない、機能的でシンプルな造形と、明晰な空間構成にある。また、そこには、都市への人口集中による環境の悪化や、戦争による大量の住宅不足という切実な社会問題に対する自覚と、その解決のために、19世紀半ばに発明された鉄筋コンクリートという新しい構造体と量産化された工業化素材によって、建築を権威や象徴としてではなく、人びとの生活環境を改良できる普遍的な方法を切り拓こうとする使命感があった。

こうして、およそ100年前に誕生したモダニズム建築は、いつしか形骸化して出発点にあった思想や方法の多くは見失われているものの、住宅や集合住宅、庁舎やオフィスビル、学校、病院、図書館、駅舎などに象徴されるように、現代の私たちの日常生活世界を形づくる基本的な枠組みであり続けている。すなわち、モダニズム建築100年の歴史をたどり、そこに実現された建築を見直すことは、そのまま、現代の建築と都市のあり方を考えることにつながる。けれども、そのような回路が広く社会的に共有されていると言えるだろうか。残念ながら、建築界においても、そのことが基礎的な教養となっているとは言いがたい。しかも、2000年代に入って加速する都市の大規模な再開発に見られるように、目の前で起きている都市景観の激変を説明できる見識が建築界にあるのかも疑わしい。もちろん、筆者もおぼつかない。その一方で、近年では、建築への関心が高まり、各地の見学会や建築展に多くの

人たちが集まり、活況を呈している。このような建築をめぐる非日常的な観光による注目(ハレ)と、見えにくい日常生活世界(ケ)との断層をどう考えれば良いのだろうか。

建築を独学で学び、新進の建築家としてフランスで活動していたル・コルビュジエが、第2次世界大戦下の1943年に発行した著書(岸田省吾監訳・櫻木直美訳『建築家の講義——ル・コルビュジエ』丸善、2006年)に、学生たちへ向けた次のような言葉がある。

「社会が、その永続のために当然追求する最初のものである。人の住まいである。風雨や泥棒から人を守り、何よりも家庭の平穏を保ち、そのための配慮を一切怠らない住まいがあつてこそ、人の社会は自然の理から逸脱することなく調和を保った存在として発展することができる。今日許容されている住まいは、こうした社会が目指すものとは無関係になっている。(…)人が生活する環境について、今までなんの関心も払われなかった。日々の存在、そして街角、広場、自室で費やされる時やそれぞれの瞬間、それは来る日も来る日も、生まれてから死ぬまで繰り返される。このような場所のすべてが感動を秘め、我々が人生に、目覚めたその瞬間から、意識を育んでいくまさに背景となる。」

また、同じ著書の中には、「都市計画(…)その使



建築評論家・長谷川亮氏と共に。東京都美術館における建築発信の起点となった見学会。2010年4月3日。撮影：河野佑美(東京都美術館学芸員)



神奈川県立音楽堂オープンシアターにおける学生たちによる子供向け建築体感ツアー。2016年5月28日。撮影：筆者

命は、我々の文明に、自らの居場所たる家を与えることなのである」として、建築が人間に与える意味について、より深い洞察の言葉が綴られていく。

「人(…)ただの一瞬ですら、彼は建築から解放されることはない。家具、部屋、陽光、人工光、大気、気温、彼の住居の配置と機能、建物、街路、都市環境、街、街の活気、田園とその小道、橋、家宅、植物と空、そして自然。建築と都市計画は、彼の一挙一動に影響を与える。」

今から80年以上も前に発せられたル・コルビュジェの言葉からは、彼が追い求めたモダニズム建築の核心のテーマが明快に読み取れる。はたして、現在の私たちには、彼の言う「自らの居場所たる家を

与える」という「都市計画」の「使命」は自覚されているだろうか。また、それ以上に、「人が生活する環境」への「関心」はあるのか。極めて心もとないことに気づかされる。そう考えるとき、求められるのは、身近な生活環境を形づくる住まいや建築、都市の生きられた日常風景に対する眼差しの共有ではないだろうか。そして、そのためにも、ほとんど意識されていなかった、現代の建築のつくられてきた歴史や、そこに積み重ねられてきた方法の価値や意味を、具体的な建築を通して体感し、語り合うことなのだと思う。

そのような試みは、実は、すでに全国各地で草の根的に始まっている。しかも、注目すべきは、それらの「建築を識る」活動の担い手の多くが、建築の専門家ではなく、その建物を日常的に使っている利

用者や働いている職員・教員であり、そこに通う児童や生徒、学生を巻き込みながら、「建築を語る」経験が積み重ねられているのである。そんな光景を、近年、筆者は、慶應義塾幼稚舎、普連土学園、慶應義塾大学、東京都美術館、埼玉会館、神奈川県立音楽堂などで目撃してきた。そのたびに教えられることも多い。そして、何よりも感銘を覚えたのは、参加者が建築に親しみ、愛着をもって接している姿から、ル・コルビュジェの唱えた「自らの居場所」を育むことの喜びが伝わってきたことだ。こうした活動が少しずつ広がっていくことの先に、生活世界への眼差しが共有される道筋が見えてくるに違いない。



楨文彦氏の卒業アルバムに登場する本館3階テラス 撮影：土門拳 福澤研究センター所蔵

## 建築アーカイブと教育

岩井 祐介

(慶應義塾幼稚舎教諭)

TEXT: IWAI Yusuke

### アーカイブに触れる

「グラウンドに降りる階段はこちらの向きの方がいい」「廊下のこの照明の形がいいね」「造形室はこっちの方が格好いい」「テラスの扉はこちらの方が全開放できて、健康第一主義に相応しいかな？」

これは私が担当している小学6年生を対象にした選択授業「幼稚舎の建築」の様子である。『国際建築、第13巻5号、1937』を子どもたちに配り、今、自分たちが生活している本館校舎と1937年竣工当時を比べてみようという課題だ。約90年前の写真で気になるところをマーカーで塗ってみる。みな先程のようにつぶやきながら作業を進めている。

また同じ資料を使って、本館廊下の腰壁の色「淡緑色」を探る活動を行った。1937年のモノクロームの記録写真からは、色の情報が得られない。そこで子どもたちとこれまで塗り重ねられてきた壁を紙やすりで削り、ついに竣工当時の塗装色を発見した\*1。さらにその色を元に廊下を再塗装し、この色は現代の塗料品番に置き換えて記録した。こう

して約90年を経てオリジナルカラーに出会った全校の子どもたちが「淡緑色」に注目することになった。

学校という場所はアーカイブが充実している。出版されている建築資料や図面だけでなく、学校が発行した文集や新聞といった利用者側の記録が残っている。たとえば本館校舎ができた当時の文集を読むと、ある6年生が次のように書いている。「天現寺橋のほitori、白いスマートなコンクリート造の校舎こそ、僕等の新幼稚舎である。此の校舎は去年の九月に上級生だけ入る事が出来たので、四年生以上が先ず引移った。続いて下級生は今年の一月から移って来た。外側は真白だが、中も亦同じようにきれいだ。僕が此の校舎に入った時は、五年生だったから二階の教室で勉強した。此の新校舎は南側に全部ベランダがあり、下級生の方は東側にベランダがある。そして寒い時期にはスチームが床の下に通っていて、頭痛がしないように出来ている。此の為に僕は病気をまぬかれた事がある。\*2」

同じ時期に三田からこの新校舎に移り、学校生活を送ったのが楨文彦氏である。楨氏の卒業アルバムを見ると、本館3階のテラスで集合写真を撮っている。通風と採光を最大限に配慮した「開放教室」を実現した校舎を象徴する場所の一つだ。その楨氏が設計したスパイラルの40周年を記念した展示「楨文彦とスパイラル——アートの生きる場所」を、選択授業「幼稚舎の建築」を履修している子どもたちと鑑賞しに行った。すると後に次のよう

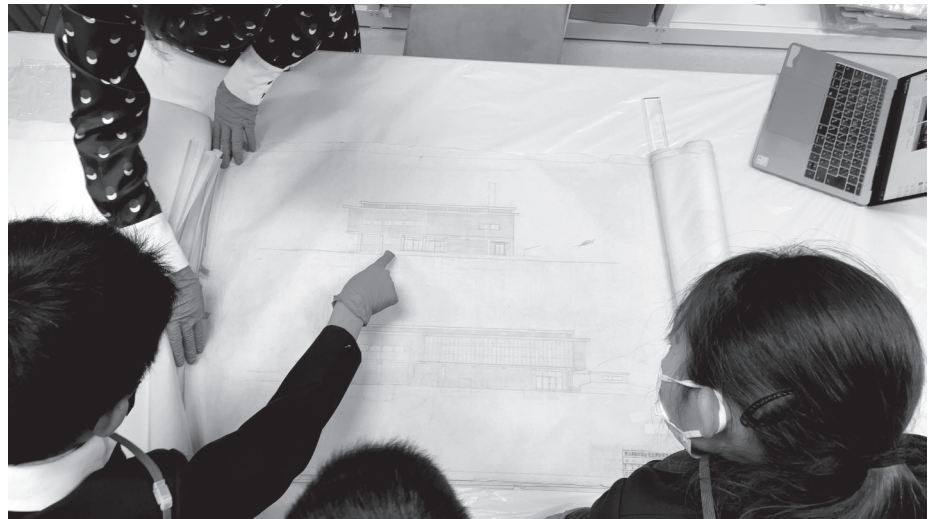
な感想が寄せられた。「特に図面が凄かったです。あの図面が手書きなんて信じられない!と家で振り返っていて思いました。もちろんその場でも。楨文彦さんがどういうデザインを意識しているかは今回だけでは分かりませんが、また機会があれば楨文彦さんの建築に行ってみようと思います。」このように建築そのものを体験することとアーカイブに触れることは、現在から過去へ、現在から未来へと、自由に行き来することができる。

### 校舎を教材にする

私が幼稚舎で子どもたちと建築の活動をはじめたのは2020年であった。2024年に迎える創立150周年に向けて、どのような環境を再整備していくのか、学校が検討している時期であった。校舎は長い時間を過ごす住まいの延長のようなものである。しかしそれゆえ誰も意識せずに使っている。そのこと自体は自然ではあるが、次第に継承されてきた建築文化が失われるかもしれないと感じていた。幼稚舎には、本館(谷口吉郎+曾禰中條建築事務所、1937)、小体育館(谷口吉郎+曾禰中條建築事務所、1937)、自尊館(谷口吉郎、1964)、百周年記念棟(谷口吉郎、1976)、新体育館(谷口吉生、1987)、新館21(谷口吉生、2002)と谷口父子が設計した6つの校舎が現存している。それぞれの校舎には、その時代とともに、学校が掲げた理想と、それに応えた建築家の挑戦が宿っている。自分



慶應義塾幼稚舎本館廊下腰壁の塗装調査、2023年



慶應義塾大学アート・センターに自尊館の原図を見に行く、2021年

たちが6年間過ごしてきた環境が、どのようにデザインされてきたのか、この校舎群を教材に考えてみることは、この学校に相応しいものではないかと考えた。授業をはじめると、子どもたちの理解が早く、深く、驚かされる。授業の導入で谷口吉郎・吉生の作品ポストカードを使って、どちらの作品かを分類するゲームを行う。するとほとんど正解してしまう。また校舎を自分で観察し、谷口吉郎が実現した「健康第一主義」を感じる場所を探してきてもらうと、通風と採光を体感できる玄関など、特徴的な場所を次々に見つけてくるのだ。授業では各校舎を年代順に扱い、3月には「慶應義塾幼稚舎建築見学会」を開催している。見学会では DOCOMOMO Japan\*<sup>1</sup>に所属している方や慶應義塾に所属している学生および教職員を対象に子どもたちがツアーを行っている。自分たちの校舎を外部の方が見に来る機会は非日常であり、子どもたちは嬉々として見学者を迎え、案内している\*<sup>4</sup>。

### 学校建築の豊かさ

東京都美術館で2025年11月22日に神奈川県大学の松隈洋教授とオープン・レクチャーをさせていただいた\*<sup>5</sup>。幼稚舎での建築に関する活動は、松隈教授の励ましがきっかけとなりスタートした。それから試行錯誤しながら5年間続けてきて気付いたことは、「学校建築は建築を学ぶ上での教材になる」ということである。学校はアーカイブが充実している。校内には文集や新聞といった利用者側の記録が残っており、まさに「ユーザー・マインドの建築アーカイブ」が存在している。これらは教材として活用できる。こうした資料を使った授業は、子どもたちの興味関心が高く、自分の関心ごとが建築を通して社会につながる、良い経験になっている。自分たちで校舎を観察し、研究し、伝える活動を通して、建築を識り、建築を語る。学校建築は、建築という文化を保存し、活用し、未来へ引き継いでいくことができる、豊かさを持っている。

- \*1 東京科学大学安田幸一研究室長沼徹氏との共同調査、2023年
- \*2 『文と詩』6巻3号、慶應義塾幼稚舎、1937年
- \*3 DOCOMOMO(Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織)。幼稚舎本館校舎は1999年に日本で最初の20選となる。
- \*4 毎日新聞2024年3月29日夕刊と建築ネットマガジン「BUNGA NET」2025年3月25日でその年の様子を見ることができる。
- \*5 東京都美術館×東京藝術大学 とびらプロジェクト オープン・レクチャー Vol.16 みんなのけんちく〜みる・知るからはじめよう〜、2025年11月22日 <https://tobira-project.info/archive-0116/>

## 豊かなキャンパスライフが生ま出す やわらかい空間

### ホルヘ・アルマザン

(アート・センター所員、慶應義塾大学理工学部教授)

TEXT: Jorge ALMAZÁN

### 清水 俊祐

(慶應義塾大学理工学研究科)

TEXT: SHIMIZU Shunsuke

建築は形式的な美しさを重視すべきか、あるいは機能性を優先すべきかという問いを巡り、長きに渡って議論が展開してきた。とりわけ20世紀以降に広まった近代建築は、合理性と効率性を基盤として、空間を明確な用途に基づいて構成する設計態度を確立した。この考え方は日本の大学キャンパス空間の形成にも大きな影響を与えており、慶應義塾大学における戦後のキャンパス整備においても、教室、研究室、実験室といった教育・研究機能を明確に節節し、それらを効率的な動線で結び構成が多く採用されてきた。こうした構成は、教育・研究活動のための合理的な基盤を提供してきた一方で、その空間の使われ方は特定の目的と強く結びついていた。

1960年代以降、このような機能主義的な建築観は批判にさらされた。建築を特定の目的に還元する考え方では、無目的な空間で生まれるインフォーマルな交流や、人と人との関係性を十分に捉えきれないという指摘であった。廊下やエントランス、屋外の余白といった中間的な空間では、人々が立ち止まり、会話し、偶然の出会いが生まれる。こうした出来事は、コミュニティ形成や自発的な知の共有といったインフォーマルな交流に重要であるにもかかわらず、従来の設計では副次的なものとして扱われてきた。

この問題は、教育環境において特に顕著に現れる。学習は講義室の内部だけで完結するものではなく、授業の前後や移動の際に交わされる会話や、何気ない滞在の中で深まっていくものである。新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、慶應義塾の教育が長期間オンライン化された際、知識の提供は継続されたものの、学生同士のインフォーマルな交流は失われ、学生の孤立や帰属意識の低下が顕在化した。私たちはこの経験から、大学が単なる教育機能の集合体ではなく、出会いや交流を通じて学びを育む場でもあることを再認識することとなった。

慶應義塾大学日吉キャンパスもまた、合理的に構成された大規模なキャンパスであるが、建物の間や屋外空間には、これまで十分に活用されてこなかった中間的な場所が存在している。本稿では、日吉キャンパス内の中間的な場所に着目し、軽量で可変的な建築的介入を実践してきた私たちの研究室(Studiolab)の取り組みの紹介を通して、学習とキャンパスライフを支える「やわらかい空間」を生み出す手法について検討する。

## 日吉キャンパスにおける建築実験

こうした認識を背景に、日吉・矢上キャンパス所属の一部の教員の間で2022年度より、インフォーマルな学習とキャンパスライフを再生するための実験的取り組みが始動した。私たちは、日吉キャンパスの北側の屋外空間に着目し、軽量かつ一時的な建築介入によって「中間的な空間」を改善するための実践を行ってきた。その目的は、低コストかつ既存インフラへ統合可能な建築的操作を実践し、その操作が学生生活へ及ぼす影響を実証することであり、これまで日吉パビリオン、リボンテラス、エコシェルターの3つの実践を行った。



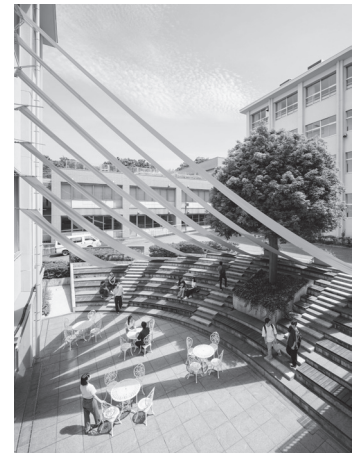
学生達の憩いの場となった日吉パビリオン(撮影:アルマザン研究室、2023年4月)

## 日吉パビリオン

日吉パビリオンは、かつて第5校舎の建っていた空き地に創り出された、半屋外の小規模な木造休憩空間である。第5校舎の解体後、通過動線としてのみ使われていた敷地へ日陰と座席を創り出し、学生同士の自発的な交流を促すことを目指した。また建設段階から学生同士の交流を生み出す効果を意図して設計されており、2023年3月に実際に学生参加型で建設された。4つのベンチとメッシュ膜による日除けを備え、材料の木材は再利用やリサイクルを前提に寸法が決められており、環境的持続可能性にも配慮したベンチであった。多くの学生に利用されたこの実験的な休憩空間は、2025年3月に学生参加型で解体されたが、解体された木材や土嚢は全て、別のプロジェクトへ再利用された。

## リボンテラス

リボンテラスは、第6校舎内のカフェテリアに隣接するサンクン・アンフィシアターの活用促進を目的としたサンシェード膜であり、2024年9月に設置された。建物から吊り下げたリボン状の膜が視覚的なランドマークとなり、快適な日陰空間を生み出している。行動観察とカフェテリアの利用実績より、サンシェードの設置前後で利用者数が1.5~2倍に増加したことが確認された上、サーモカメラによる夏季の計測では日陰部分の表面温度が日向部分と比較して約20℃低下していることが確認された。また簡易な撤去・調整が可能な設計となっており、強風や降雪が予想される際は、管理者の手で容易に着脱できる点も特徴である。



グリーンズテラスに柔らかな影を落とすリボンテラス(撮影:大倉英揮、2024年7月)

## エコシェルター

日吉パビリオンとリボンテラスでは半屋外空間を創り出したが、続くエコシェルターでは、夏の暑さや冬の寒さを凌ぐ屋内環境を、学生参加型で創り出すことを目指した。第5校舎跡地を敷地として、2025年8月の1か月間、建設会社指導の下、1日平均6名の学生によって建設された。屋内環境の計測実験や、様々な教育の場として利用された後、2026年8月には解体され、場合によっては別の場所へ移設される計画である。

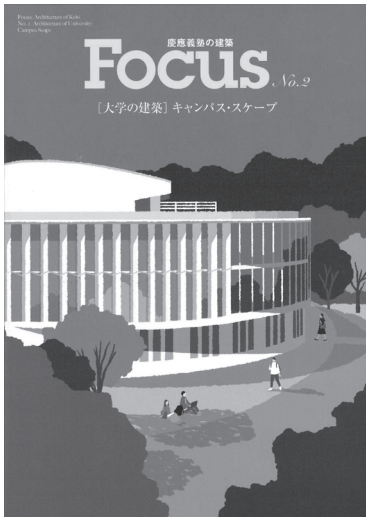
木造建築であるエコシェルターでは、資源効率を重視して、日吉パビリオンからのリサイクル材と、宮城県南三陸町にある「慶應の森」の杉材が使用された。慶應義塾自前の森林から調達した木材を用いて、学生自らの手で建築を建設する仕組みにより、資源の調達から流通、生産までの一連の建設プロセスを透明化し、循環型経済を促す新たな教育機会となった。また宮城県南三陸町という2011年の震災と津波により甚大な影響を受けた地域の再生に貢献する効果もある。



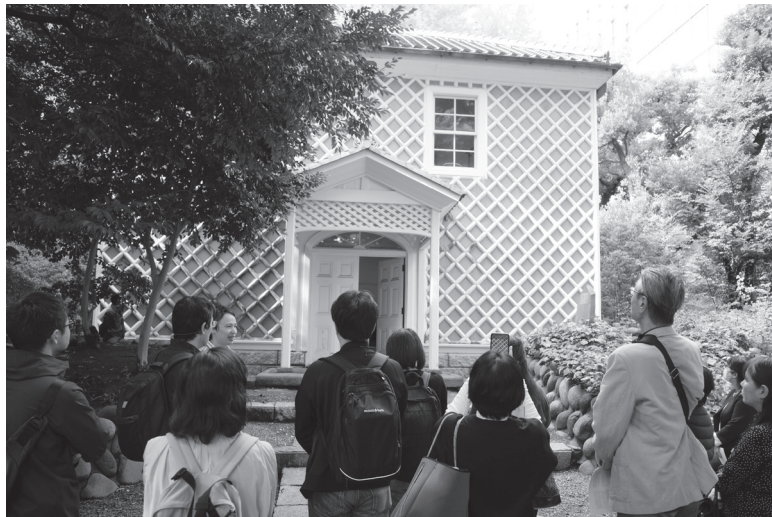
「慶應の森」の木材で作られたエコシェルター(撮影:アルマザン研究室、2025年9月)

## 結び

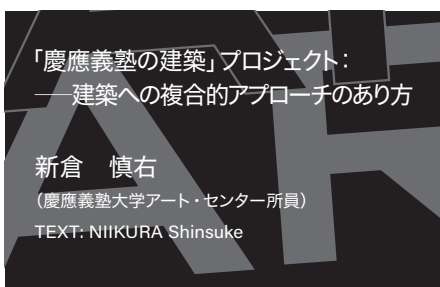
これらの事例から、大学キャンパスの中間的な空間への「やわらかい建築」の導入により、インフォーマルな交流が促進され、学習環境が強化される可能性が示された。スクラップ&ビルドに依存せず、小規模ながらも場所に適応した介入手法を探ることで、既存の学習環境を活性化できる道がある。中間的な空間は依然として大きな潜在力を秘めており、パンデミックによって示された、出会いと協働、創造的な交流を育む場としての大学の本質を、今改めて強化していく必要がある。



『Focus No.2 大学の建築：キャンパス・スケープ』慶應義塾大学アート・センター、2023年



建築プロムナードのガイドツアーで三田演説館を見学する参加者、2025年



慶應義塾大学のキャンパスにある建築群の中には、単なる校舎を超えた文化的価値を有する建築物が多く存在している。たとえば擬洋風建築の三田演説館(1875)や図書館旧館(曾禰中條建築事務所、1912)のような歴史を経た建築物だけでなく、谷口吉郎による幼稚舎本館(1937)あるいは日吉寄宿舎(1937)、さらに楨文彦が設計した図書館(1982)、大学院校舎(1985)、日吉図書館(1985)といった近代以降の建築もまた、大学が誇る文化資源と呼んで差し支えないものである。慶應義塾大学アート・センターの「慶應義塾の建築」プロジェクトは、もうひとつの重要な文化資源である「ノグチ・ルーム」(谷口吉郎による第二研究室の談話室として1951年に完成)に関する資料を収集するノグチ・ルーム・アーカイヴのブランチとして、2008年に成立したアーカイヴである。価値ある学内建築物がさまざまな理由で取り壊されるにおよび、それらの保存や継承を図るべく、建築図面のデジタル化や写真撮影を通じたアーカイヴィング、2次資料の収集などを開始した。現在では現存する建築物の写真撮影や資料収集も行い、また専用の展示スペースであるアート・スペースにおいて、慶應義塾の建築に関する展覧会を開催してきた。

「慶應義塾の建築」は、形式としては建築アーカイヴではあるものの、通常それとして認識されるような内容を具えているわけではない。ある建築物の図面や模型のような1次資料を網羅的に所蔵してはいないからだ。もとよりアート・センターは文系の芸術研究所であり、建築やそのアーカイヴ化の専門家を擁さない上、小さな組織ゆえ資金も乏しい。そのため本アーカイヴは一般的な建築アーカイヴの構

築を追求せず、当センター独自のより特徴ある活動を展開する必要があった。その結果見出されたのが、当アーカイヴが掲げる「ユーザー・マインドの建築アーカイヴ」である。通常の建築アーカイヴが、建築物が竣工した時点で一定の区切りを置き、建築作品の完成とみなすのに対し、当アーカイヴでは建築物の竣工を、その「人生」の始まりと捉える。というのも建築物は完成後、物理的な建築物というハード面だけでなく、その用途や機能、あるいは象徴性も時間軸をもっているからである。またそうした時間的な経過の中でどのような人々が集い、どのような活動が行われ、いかなる記憶が積層していったかといったソフト面も建築を語る上で欠くことのできない要素として、ハード面と合わせた総体として捉えようという態度を、当センターは「ユーザー・マインドの建築アーカイヴ」と呼んでいる。

このような建築の捉え方は、通常の建築アーカイヴのオルタナティブとなりうる。というのも上記のように、これまでの建築アーカイヴは、竣工にかかるハード面を主に射程としているからで、建築家がいかに自らの想定を超える利用を期待し実際にそうなったとしても、そうした建築物のありようがアーカイヴに反映されることは基本的になく、少なくとも利用者が利用に際してどのように感じていたかというユーザー視線は置き去りとなる。しかし建築物が時を経ることで象徴化するのには、建築物を利用し、活動し、内面化した人々によって蓄積された振る舞いや記憶が、建築物の形態や機能との相互作用を通して結晶化するからである。建築物を社会的存在として受容するのであれば、こうしたソフト面への目配りは欠かすことができない。むしろ社会で個々人が建築との関わりを結ぶ場合、直感的に感じるのは空間の形式であると同時に、その建築が経てきた歴史であり、人々の営みでもありうるのではないか。建築物が取り壊された際に、通常の建築アーカイヴであれば姿形を再現することはできるかもしれないが、それは竣工後の「人生」が漂白された「標本」となる危険性もある。このように考えるとき、「慶應義塾の建築」における「ユーザー・マインドの建築アーカイヴ」は、建築アーカイヴに対して

だけでなく、建築を語り語る上での新たな視座を提供することになる。

筆者は近年、このような複合的アプローチによって大学キャンパスにおける近代建築が織りなす建築環境を分析する枠組みとして「キャンパス・スケープ」を提唱している。大学キャンパスはそのほかの建築環境と比べて建築物の循環期間が長く、近代建築もしばしば遺されており、さまざまな年代の複数の建築物が立ち並ぶ特異な景観を形作っている。こうした大学キャンパスにある近代建築が、大学の象徴としてさまざまな場所で紹介されているのを、よく目にする。意識しているか否かにかかわらず、建築物に学びの環境に資する価値を認める態度は、まさに「ユーザー・マインドの建築アーカイヴ」が焦点とする、建築物が纏うソフト・パワーを受容した結果であるといえるだろう。最近ではキャンパス作りにこのような観点が取り入れられることが増えているが、建築環境が大学生のような人格形成期の人々に大きな影響を与えることは明らかであることから、こうした方向が定着するか注視していきたい。アート・センターが2023年に刊行した『Focus No.2 大学の建築：キャンパス・スケープ』での分析の結果、慶應義塾のみならず他の大学でも、近代建築とそれが纏う象徴性というハード面とソフト面の双方が大学の特色あるコミュニティ形成に大きな影響を与えていることが示唆された。したがってキャンパス・スケープという概念は、建築だけでなく、建築とキャンパスや大学との関係性を問う上での枠組みとして機能すると考えてよい。

慶應義塾大学アート・センターの「慶應義塾の建築」プロジェクトと「ユーザー・マインドの建築アーカイヴ」の考え方、そしてその活動は、既存の建築アーカイヴを補完する取り組みであるだけでなく、建築のあり方、建築と人との関係における新たな側面に光を当てる試みである。建築見学イベントなどが昨今盛んに開催されているが、そうした際に提供される知識や空間体験に加え、場の文脈や歴史、利用の変遷やユーザーの声などを加味する複合的なアプローチをとることで、より豊かで総合的な建築体験が実現できるはずである。

## 活動報告

## ■展覧会

アート・アーカイヴ資料展XXVIII「幽暗Shadow World——藤籐と立ち上がる土方異の振付世界」

会 期 | 2026年1月19日(月) - 2026年3月14日(土)

特別開館 | 1月31日(土)、3月14日(土)

臨時休館 | 2月2日(月)、3月9日(月)

場 所 | 三田キャンパス南別館1階アート・スペース

「幽霊」というイメージに結びついた特定の動きに注目し、海外の新たな視点と新たな映像の手法を得て、舞踏譜をベースにした土方異の舞踏メソッドを提示し問いかけます。現在から50年前にあたる1976年から、土方による創作活動の流れを俯瞰しつつ、中でも1977年《小林嵯峨舞踏公演》(にかい光)と1978年《仁村桃子舞踏公演・アスベスト館松代分室設置記念》(最初の花)の二作品を紹介しします。

## ■関連イベント

- ・没後40年 土方異を語ることXV 2026年1月21日(水) 三田キャンパス 東館6階 G-Lab
- ・舞踏家・小林嵯峨による身体ワークショップ「ごころ」 2026年2月21日(土) 三田キャンパス 南館4F 会議室
- ・特別上映会「70年代後半における土方異の振付II」

《仁村桃子舞踏公演・アスベスト館松代分室設置記念》(最初の花) 上映 2026年3月12日(木) 三田キャンパス 東館6階 G-Lab

《小林嵯峨舞踏公演》(にかい光) 上映 / 「Butoh Scores 研究発表」ローザ・ヴァン・ヘンスパーゲン 2026年3月14日(土) 三田キャンパス 東館6階 G-Lab

■今後の展覧会予定(※タイトルおよび会期は変更される可能性があります。)

場所 | 三田キャンパス南別館1階アート・スペース

アート・アーカイヴ 資料展XXIX「慶應義塾の谷口吉生」 2026年5月11日(月) - 7月17日(金) (予定)

慶應義塾の建築プロジェクトでは、ユーザー・マインドの建築アーカイヴを標榜して活動を展開し、学内の建築を対象とした展覧会も開催してきた。今回は慶應義塾出身で一昨年この世を去った世界的建築家、谷口吉生を取り上げる。建築家の谷口吉生は、慶應義塾のキャンパスにおいて、他者の建築との共鳴のもとで新たな環境を生み出してきた。幼稚舎では父・吉郎の本館に新館21を接続し、湘南藤沢キャンパスでは、盟友・楨文彦の大学キャンパス外郭に位置する中等学校校舎を設計している。建築物を取り巻く環境を活かした設計を行う谷口吉生が、建築を通して両先達とどのような対話を重ねたのかを探る。

SHOW-CASE PROJECT Extra-3「冨井大裕」 2026年10月5日(月) - 12月18日(金) (予定)

アート・センターは2011年度より、現代美術を取り上げ、大学で学ぶ学生に同時代美術を知る機会を提供する展示を開催している。新たな試みとして、美術家・冨井大裕と取り組む3年間にわたる展示プロジェクトに取り組んでいる。そのSHOW-CASE PROJECT Extraの3回目の展示である。既製品を用いた冨井らしい作品と意外性のある石膏作品を並置した第1回「モノコトの姿」に続き、第2回「接点の都合」では、旧作も含めた定規を用いた作品を展開した。最終回の今回はいかなる展示となるか。今回は、Extra シリーズのもととなった展示ケースひとつのSHOW-CASE PROJECTも併せて実施することも視野に入れている。展覧会は時間と場所が区切られている「出来事」である。通常は一期一会的に成り立つもので、それが展覧会の魅力でもある。その「出来事」を3年の連続形で考えることによってどのような展開が可能となるか、小さな展示室から新しい「出来事」の挑戦を発信する。

スタンリー・ブラウン展 2027年1月18日(月) - 3月19日(金) (予定)

オランダ領ギアナ(現スリナム共和国)出身で アムステルダムを拠点として活動したアーティスト、スタンリー・ブラウンを取り上げる。彼は自らの身体を用いて長さ・距離や単位、測ることをその身に引き戻しつつ、尺度や測ることそのものを問い直す。その作品は日常的な事象に対する再考と再発見を促すものである。インデックス・ボックスを含めた個人コレクションとしては世界唯一のブラウン・コレクションを所蔵するヒコセ・コレクション所蔵の作品群を展示予定。

## ■研究会

## 西脇順三郎研究会

西脇順三郎研究会の本年度の活動は、昨年度につづき対面とzoomオンラインの併用で開催した。2025年5月に第71回(朝吹亮二氏)、7月に第72回(佐藤元状氏)、8月には故新倉俊一氏を偲ぶ会を第73回の研究会として開催した。続いて第74回は9月に(久村亮介氏)、第75回は11月に(再び久村亮介氏)、第76回は2026年3月に、西脇研究会を公開研究会として対談形式の催事とし、本年度は合計6回開催した。

本研究会は、詩人、研究者、翻訳家、現役大学院生等をメンバーに有し、毎回担当者がテーマを設定して発表を行い、各メンバーとの議論を深める形式をとっている。多角的な切り口をもって、西脇順三郎の詩、詩論等を分析対象とすることで、西脇の詩世界の深奥を探索することを目的として活動し、各回の音声記録もアーカイヴしている。1月に開催した「アムバルワリア祭XV」は研究会の野村喜和夫氏による企画で、研究会メンバーの安智史氏、栗原飛宇馬氏に登壇いただき、研究会での議論の成果を広く社会に公開する機会となっている。

また、西脇の故郷である新潟県小千谷市が創設した「西脇順三郎賞」は第4回を迎え、アート・センターは実行委員会のメンバーとして協力している。選考委員には研究会の野村喜和夫氏(選考委員長)および朝吹亮二氏(選考委員)が参加している。

## 研究会mandala musica

“油井正一アーカイヴ”公開Jazz研究会「拡張するジャズ」では、今年も様々なゲストに登壇していただき、開催することができた。

Seiko Presents “拡張するジャズ”「狭間美帆+KLMSワークショップ」 2025年9月30日(火) 三田キャンパス 西校舎ホール

mandala musica レクチャーコンサート 久保摩耶子『ベルリン日記』 2025年11月26日(水) 三田キャンパス 西校舎ホール

Seiko Presents “拡張するジャズ” 瀬川昌久メモリアル・シンポジウム 2025年12月22日(月) 三田キャンパス 西校舎ホール

## アーカイヴの形態学研究会

昨年度に引き続き、オンラインで読書会を行なっている。テキストも昨年を継いでブルーノ・ラトゥール『社会的なものを組み直す』。

## 瀧口修造研究会

アート・センター・アーカイヴの「瀧口修造コレクション」が行ってきた研究活動をさらに活性化し、その継続的かつ創造的核となることを目的として、2021年6月に設立された。瀧口の戦前戦後を通じた領域横断的アクチュアリティをいかにして現在に接続するか——これが当面の研究会のテーマである。メンバーは義塾の内外から集まった研究者とクリエイターで構成され、ゲストが参加することもある。2022年度より年に1度、公開シンポジウム「パピエリエ」を行う。現在、基本的に隔月で開催し、その模様の一部は研究会機関誌『マージナリア・ジャーナル』に報告されている。アート・センターWebサイトからご覧いただければ幸いである。

## ポर्टフォリオBUTOH

ポर्टフォリオBUTOHは、小菅隼人、石本華江を中心として、研究上映会や催事を通して、研究活動を積み重ねている。多くの企画に協力しているが、2025年度の研究活動では、大規模なものとして、次の2つの催事にかかわった。

1. 「新入生歓迎行事 今貂子舞踏公演——彗星」主催 慶應義塾大学教養研究センター／慶應義塾大学アート・センター、2025年5月21日、慶應義塾大学日吉キャンパス来住舎(今貂子とRYOTAROとのコラボレーション)。共同主催・企画・運営。
2. 「教養の一貫教育Vol.12 舞踏家・小林嵯峨による舞踏ワークショップ——ごころ」主催 慶應義塾大学教養研究センター／慶應義塾高等学校、2025年12月17日、慶應義塾高等学校日吉協育ホール。

また、小菅と石本による三田キャンパス春学期設置講座「現代芸術I：舞踏学序説」に協力し、教育と研究の有機的接合を目指している。

ARTLET 第64号

発行日：2026年3月31日

編集：後藤文字

脇田 玲

糸川麻里生

渡部葉子

市川佳世子

高野泰彦

制作：図録社

発行：慶應義塾大学アート・センター

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

TEL：03-5427-1621(直通)

FAX：03-5427-1620

<http://www.art-c.keio.ac.jp/>

E-mail: [ac-office@art-c.keio.ac.jp](mailto:ac-office@art-c.keio.ac.jp)

COPYRIGHT ©2026  
BY KEIO UNIVERSITY ART CENTER

アート・センターでは、講演会、ワークショップなどの催しや研究活動を随時企画しております。詳細についてはセンターHPをご覧ください。



慶應義塾大学  
アート・センター  
KEIO UNIVERSITY ART CENTER